2026_0114「厳寒の浅間山 ― 朝日に浮かぶ白い息吹（動画）」日々の理科 4175 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

１月中旬、いちばん寒さが厳しい季節の浅間山です。北軽井沢から望む山体は、裾野から中腹にかけては深い影に沈み、山頂付近だけに朝日が差し込み、そこだけが淡い橙色に染まっています。夜の冷気をたっぷりと抱え込んだ空気の中で、朝の光が山の輪郭をゆっくりと浮かび上がらせる、この時間帯ならではの表情です。

浅間山は日本を代表する活火山であり、静かに見えるこの瞬間にも、山頂部からは絶えず白い煙のようなものが立ちのぼっています。一見すると噴煙のように見えますが、これは火砕物を伴う噴煙ではありません。火山内部から放出される火山ガスに、水蒸気が混じり、外気の冷たさによって急速に冷やされ、細かな水滴として凝結したものです。言わば、巨大な山が吐き出す「湯気」のような存在です。

特にこのような厳寒期には、外気温が極端に低いため、凝結が起こりやすく、白煙はもくもくと量感をもって見えます。季節によっては目立たないこの現象も、真冬には浅間山が生きている火山であることを、視覚的にはっきりと伝えてくれます。

手前には、すっかり葉を落としたカラマツ林が広がっています。冬枯れの枝越しに見る浅間山は、色彩を削ぎ落とした世界の中で、朝日に染まる山頂だけが際立ち、厳しくも凛とした美しさを感じさせます。この眺めは、北軽井沢ならではの冬の風景です。

なお、この写真は現地に立って撮影したものではなく、東京からの遠隔撮影によるものです。距離を隔てていても、厳寒の空気感や、浅間山の呼吸のような白い動きまでが伝わってくるのは、この山が放つ存在感の強さゆえでしょう。

（2026 年 1 月中旬／北軽井沢／東京から遠隔撮影）